

二次元ぷち文庫

表紙イラスト…あかめ
天戸祐輝



長士騎女

リフティエア

～ 砕かれる精神 ～

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『女騎士長リフィティア ～碎かれる精神～』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



女騎士長
リフイティア

～ 砕かれる精神～

天戸祐輝

表紙／あかめ

登場人物紹介

Characters

リフィティア・ル・イルラード

剣術で類まれな才能を持ち、若くして一部隊の隊長となった少女。凛々しく、通常時には女らしい優しさで部下を気遣うため、部隊の忠誠心は高い。本人は隠しているつもりだが、幼馴染みの少年にはベタ惚れ。

レクアード・ナスト

主人公の幼馴染みの少年。愛称はレド。剣の腕も並み、貌も並み、しかも臆病なのが主人公に惚れられて世話を焼かれている。

「両翼の兵は包围しながら奴らの逃げ道を塞げつ！ 残りの者は私に続けつ、一気に蛮族どもを蹴散らすぞつ！」

薄汚い山賊に襲われ、怒号と悲鳴がとどろくマミスナ王国边境の村。

血潮と、火で燃え焦げた木々の匂いが漂う深夜の村に、場違いなほど透き通る女性の美声が響き渡った。

「村々を襲い、人々を虐げ世を乱すクズどもつ、マミスナ王国、第三十二イルラード隊騎士長、このリフィティア・ル・イルラードが駆逐するつ！」

鬼気迫った戦場の空気を、一瞬止めてしまうように奏でられた凜とした美声。

そこに目を移せば、十代後半の少女が栗毛の馬背に乗り、三十数人に及ぶ屈強な騎士たちを従えていた。

「けっ、こんな边境の村に派遣されるような部隊、怖くねはえぜつ！」

「これ以上の略奪は許さないつ、はああああああああつ！」

月光でシャープな輪郭を描く顔を際立たせ、切れ長で青く澄んだ瞳を輝かせるその少女は、自分たちの前に立ちふさがった一人の山賊に狙いを定め、小さな花びらのような唇で気合を張り上げながら馬を走らせた。

まるで天馬でも乗っているように愛馬を疾走させ、長いロングストレートの青紫の髪をマントの如く靡かせる彼女は、騎士とは思えないほど細身の肢体をしている。

上布で作られ、胸元が少し開いた女物の鮮やかな青色の半袖チュニックと、戦場には不釣り合いな同色のミニスカート。そして、その上からなめし革で作られたコルセット調の軽鎧をまとった彼女は、腰鞘から銀色に輝くレイピアを抜き放ち、狙いを定めるように高い鼻頭を薄汚い山賊に向けた。

「けっ！ 生意気な女騎士など、この斧で手足を切り落として肉便所にしてやるっ」

薄鉄製のガンレットに守られた細腕に、月光に輝くレイピアを構える女騎士長。

だが若い少女——しかも美しいその姿に、山賊は余裕で勝てると思ったのだから。薄汚い衣服に身を包んだ彼は、ひるがえるミニスカートから覗ける白い太腿に舌なめずりをしながら、リフイティアと名乗った美少女騎士を馬背から叩き落そうと、身の丈はある大斧を振り上げた。

「裸にヒン剥いて、マ○コから精液が垂れ流れるまで犯し……ぐぎゃああつ！」

馬背で跳ね上がり、ひるがえったスカートから白い下着が瞬いた瞬間。淫らな妄想を脳裏によぎらせた山賊は、素早く振るわれたレイピアの刃に切り裂かれた。

「お前たちのようなクズどもに、かける情けなどないわっ！」

レイピアに付着した血を、ビュツと刃を振るって払い飛ばし、動かなくなった山賊に侮蔑の言葉を吐き捨てる。その青い瞳は冷徹に輝き、次の相手を見つけようと、動かなくなった男から自分の周りへと向いている。

「隊長つ、向こうの家に数名の山賊が立てこもり、女子供を人質につ！」

「わかったわ、二、三人が私とともに来い。人質にされた村人を助け出すつ！」

年上の男性騎士に報告を受け、リフィティアはすぐに馬上から飛び降り命令を下した。

こげ茶色のロングブーツと、薄鉄製のレッグガードで守られた長く細い両脚を地面につけ、凜々しく戦場に立った彼女は、戦女神と見違うほどの美少女だ。

馬背に乗っていた時にはよくわからなかったが、胸元で女らしく膨らんだ肉果実は、薄いチュニツクと軽鎧に包まれているにも拘らずお椀型の形を浮き出させ、ミニスカートの後部が丸いお尻に引き上げられて裾が短くなっている、

胸もお尻も本来ならば目を見張るほどの大きさではないのだが、騎士として鍛えられた身体にはムダな贅肉がなく、腰が一般的な女性よりも細く括れているために、見た目以上のポリウムがあるように感じてしまう。

「ふう……」

乗っているだけでも体力を消耗する馬から降りた女騎士長は、風に長い青紫の髪を靡かせながら、肉体の緊張を一瞬解いた。

戦場には不似合いな美少女の一瞬見せた無防備な姿。その佇まいだけで、彼女を見慣れている騎士たちでさえ息を呑んでしまう。

「何をしている、いくぞっ！」

「は、はっ！」

一瞬、彼女の姿に目を奪われた部下を叱責し、山賊が立てこもった家に向かっていく女騎士長。その後に、まだあどけなさが残る赤い短髪の少年が慌てて駆け寄っていく。

「まっ、待ってよりティ、ぼ、ボクも一緒に……うわああっ!？」

ドタッ……。

リフイティアをリティの愛称で呼ぶその少年は、自分の武器であるバスターソードを抱えるように持ちながら、何もないところで前のめりになって無様にコケた。

騎士部隊でも最年少。細身で身体も小さい彼は、麻で作られた半袖とズボンの上に、一部を外して軽装化させたプレートアーマーをまとっていた。しかし、鎧もブカブカでバスターソードも身に合っていない。まどついているというよりは、ただ着せられているだけという状態。リフイティアとは別の意味で、戦場には不釣り合いな少年だ。

「隊長、レクアードの奴がまた……」

「放っておけっ、今は村人を助ける事が最優先だ」

少年を氣遣ったベテラン騎士の言葉に、女騎士長は「そんな事にかまっている暇などない」とばかりに振り向かず、長い青紫の髪とミニスカートの裾をひるがえしながら歩いていく。

「ちよっ、ボクも行くって。待ってよりティ、今すぐ……うわあああっ!？」

ドタッ!

背中を見せて歩いていく女騎士長を追おうと、慌てて立ち上がった赤髪の少年騎士レクアード。しかし、今度は自分の重い剣にバランスを奪われ、顔面から地面に倒れてしまう。(ふう……。まったくレドったら、大人しく騎士宿舎で待ってればいいのに、私が心配だからって……)

後ろで再びコケた音を聞きながら溜め息を零したりフィティアは、心の中で少年をレドの愛称で呼びながら、自分を心配し戦場まで付いてくる彼に、薄桃色の美唇に嬉しそうな笑みを浮かべた。

※

「まったく、戦ってもいないのに怪我をするなんて……」

「痛っ、痛いってリティ。その傷薬すぐくしみるんだから、いてててててっ」

山賊を撃退した翌日の夜。リフィティアたちは感謝された村人たちにもてなされ、村で一番立派な村長の家にいた。

村にも当然宿屋はあるのだが、辺境の村で三十数人の騎士が泊まれるはずもなく。部隊長である彼女と数人の騎士たちが、村長のお世話になる事になったのだ。

「ほら、ちゃんと消毒しないと、化膿したら大変でしょう」

軽装の鎧を脱ぎ、女物の青いチュニックとミニスカート姿の女騎士長が床に両膝をつけ、

応接間の椅子に座ったレクアードの手当てをしている。

本来ならば、騎士長である彼女がするべき事ではないが、幼い頃から彼を知っているリ Fayetteia は、まるで姉のように嫌がる赤髪の少年をたしなめていた。

「がっはは、街でも美少女で有名な騎士長に手当てをしてもらえらるとは、この果報者め」
「しかし、騎士長もレクアードには過保護すぎやしませんかね？」

「そつ、そんな事はないわ。みんな私の大事な部下だもの、区別なんてしてませんつ」
ベテラン騎士の言葉に、顔を真っ赤にしながらごまかす。今の彼女には戦場に立っていた時の厳しい雰囲気はなく、まるで慈愛ともとれる優しい雰囲気を醸し出していた。

「もういいって、恥ずかしいからやめてよりテイ」

「もう、どこがもういいって言うの？ ほら、こんなところにも傷が……」

少年の額にすり傷を見つけた美少女が立ち上がり、前かがみになりながら消毒液を染み込ませた布を押し当てていく。

鎧を着ていた時とは違い、薄いチュニックとミニスカートという今の彼女は、無防備すぎる姿だ。細い肢体の線や括れたウエストが際立ち、コルセット調の胸当てに押さえられていない両胸が、身動きする度に揺れている。

「ちよつとりテイ……うわっ!？」

「子供の時だって傷の手当てはしてあげたでしょう、今更恥ずかしがらないの」

傷口をよく見ようと、前かがみになったまま美貌を少年の額に近づける。女騎士長にとつてはただの手当てのつもりだが、少年のあどけない顔がどんどん赤くなつていく。

「はいっ、これでお終い……どうしたの？ レド」

額の手当てをし終えた彼女が、そのままの姿勢で彼の顔に視線を向けると、レクアードは瞬きもせず自分の胸元を見たまま動こうとしない。

（もうっ、どうして私の胸を……）

恥ずかしがりながらも、悪い気分にはならず彼の目線の先に瞳を向けてみれば、ただでさえ薄く胸元が広がっているチュニツクの襟元が、更に広がって二つの肉果実を覗ける状態になつていた。

街にいる時ならばブラジャーを着けているのだが、戦場にいる時は窮屈なコルセット状の鎧に締めつけられているため、彼女は着けない事になっている。

つまり、今のレクアードには、下を向いたためにポリウムを増した白い肌の肉果実と、その頂で薄ピンクに色づいた乳芽の全てが見えているのだ。

「さっ、さあ早くお風呂にでも入ってきなさい。そ、そんな血だらけでベッドを借りたら、村長さんに、めっ、迷惑がかかっちゃうでしょう」

顔から火が出るほど真っ赤に染めながら、前かがみになつていた身体を戻し、言葉を詰まらせて薬箱をかたづけける女騎士長。その後ろでは、椅子に座つたままのレクアードが真

(このクズ男っ、レドの前で何をさせようと……)

心の中で毒づきながらも、幼馴染みの少年に向けられたボギの視線に促され、彼の命じたように両膝を床につけて座る。

「さあ、惚れている男の前で、俺様のモノを舐めてもらおうか」

「——っ!？」

驚愕に青い瞳を見開く。

彼女の目の前に立った首領が、いきなりズボンのベルトを緩め、勃起したペニスを眼前に突きつけてきたのだ。

直径三、四センチ。長さは十数センチといったところだろうか。青い瞳に映る雄槍から立ち昇るすえた匂いが鼻腔に突き刺さり、漂ってきた猛り熱が顔の白肌を灼いてくる。

「こんなモノ……口にできるはず……」

男女の肉体関係の中で、口で奉仕する術があるのは彼女も知っている。しかしそれは、金で肢体を売る娼婦がする行為。そう思っている彼女は、そっと目線を横に向け、椅子に拘束されている少年を見た。

(レドの前で、そんな事できるはずないじゃない……)

この体勢で口淫などすれば、横から男のモノを口にしてる姿がレクアードに丸見えだ。第一、そのような経験のない彼女には、どうすればいいのかさえわからない。



「惚れた男の前ではできないのか、ならばその理由を消してやろう。ふんっ！」
バギッ！

「ぐは……っ！」

ペニスを前にちゅうちよしている女騎士長を見かね、ボギがその理由を取り除くようにレクアードの肩口に拳を叩き込んだ。

部屋には重い拳の音と、骨が砕けた音が響き渡っていく。

「レドッ!? やめて……、何でもするから、彼を殺さないでっ！」

胸を庇い隠していた両腕で首領にすがりついた彼女は、産まれて初めて自分の敵に懇願した。

「ならば早くしろ」

「……はい………」

青い瞳を震わせながら傷ついた少年を見つめ、悔しさを噛み締めながら静かに答える。自分の命ならばどうなってもいい。だがレドの命なら話は別だ。

揺れる両胸を隠す事なくボギの前で跪いたりフィティアは、両手でそつと火傷するような雄槍の肉幹を握り包み、掌全体にゴム塊のような硬い感触を感じながら、小さな花びらのように薄く色づいた美唇を亀頭へと近づけた。

(ゴメンね……レド……)

初めて奉仕する相手が想いを寄せる少年ではない事を心の中であやまり、腐臭のような匂いを放つ赤黒い男の拳大の切っ先に、大きく開けた唇を被せていく。

グロテスクな雄性器に唇を触れさせた嫌悪感に、全身には寒気にも似たおぞましい感覚が趨り回り、口腔に充満してくる雄臭と淫熱に胃の中の物を吐き出してしまいそうになる。
(耐えなければ、私が拒んだらレドが……)

「んふぁ……んぷ……んう……チュウ……んふ……むうう……」

レドの事を想い、知識がないながらも必死に火傷するような熱い肉幹に舌を絡ませ、青紫の長髪を振り乱して男の股間で美貌を前後させる女騎士長。肉幹を啜えたその口元や、揺れる双美乳には山賊やレクアードの視線が突き刺さり、彼女を死にたいほどの羞恥に追い込んでくる。

(見ないで……こんな私を見ないで……レド……)

横から突き刺さってくる幼馴染みの視線に溢れそうな涙を堪え、雄槍の切っ先から溢れてくるネバネバとした先液の感触と、雄肉にこびりついた垢と雄汗の吐き気をもよおす味に耐える。

顔を前後させる度に捲れる唇や、高い鼻の先に触れる男の下毛の感触に気持ちは暗くなり、このままレドと一緒に命を奪われた方がいいとさえ思ってしまう。

「クク……下手だが、女騎士長が好きな男の前で俺様のチンポを啜え、顔を歪めている姿

は興奮するぞ。すぐに射精して、精液を飲ませてやる」

「んううう……精液ふお飲むらんで……んく……いら……」

「しゃぶりながら喋ってんじゃねえよ。そらっ！」

「んぶうううううっ！ んうっ、ふあぶっ、ふうあっ、んっ、んんんっ!？」

別の男から女を、しかも誇り高い女騎士長を奪う興奮に昂ったボギが、青紫の頭をがちりと両手で押さえ、白喉を突き破るような勢いで肉槍を喉へと突き刺してきた。

唇にブヨブヨとした気持ち悪い精囊を叩きつけられ、喉肌を膨らまされる口虐に嗚咽を洩らし、唇を淫らに捲り返される女騎士長。

息苦しさに切れ長の目から涙を飛び散らせ、上半身ごと前後に揺すられる彼女の髪は激しく乱され、喉粘膜を硬く熱い亀頭に擦られる屈辱に全身から力が抜けていく。

「んふうあっ！ はちゅぷっ、んっんっんっ……ぶうふあっ……んぢゅぷううううっ！」

（くっ、苦しい……喉が破れ……早く終わって……こんな苦しいの耐えられ……）

太い肉幹と亀頭に口腔と喉を蹂躪される悲しみに心が闇に覆われ、酸素を上手く取り込めない息苦しさに意識が混濁する。捲れ返る唇からは肉幹がピストンする度に唾液が飛び散り、口腔にまぶされたカウパー液が唇の端から零れ頬を伝った。

「くうおおおっ！ いいぞ、もう射精ちまいそうだ、必ず飲めよりティ」

「んううううっ!! いふうや……んんっ、やめ……んふっ！ んちゅぱっ、んんっ、んっ、

ちゅぱつ、んふぁ……んつ、んチュパぁあつ！」

ボギが鼻息を荒くしながら腰の動きを速め、雄槍全体をピクピクと引き攣らせ始めた。喉奥に立て続けに突き刺さる切っ先の先割れからは、射精間近である事を告げるように先液が噴き出し、穢れのない喉粘膜に雄の感触を染み込ませてくる。

過酷な喉辱に力を失った肢体は、ペニスの根元を握り包んでいた両手をダラリと下げ、上半身を揺すられて乱れる青紫の長髪とともにユラユラと揺れた。

（嫌ぁ……こんな奴のモノで喉を犯されて、精液まで飲まされるなんて……）

「うおおおおおつ！ 射精るぞリテイ、おう、おおおおおおつ！」

びゅびゅるるつ！ どぶつ……びゅぶびゅるるるつ！

「んふううううつ!! んうう……んんんんんんん—— つつつ!!」

好きでもない男の精液を喉に注がれる悔しさに背筋を寒くした瞬間。獣の遠吠えと思うような首領の叫びとともに、全体を引き攣らせながら亀頭を膨らませたペニスが喉奥まで突き刺さり、絶望的な脈動を舌上と感じさせて陵辱液が噴き出してきた。

煮えたぎったヨーグルトを思わせる汚らしい雄粘液は、喉粘膜の隅々に染み込みながら狭い喉を満たし、口腔にまで水位をあげてくる。

（うううつ!! こんな嫌だ……レドの前でこんな……）

想いを寄せる少年の前で喉を穢された悲しみが心に広がり、頬を膨らましながら口腔を

満たし、舌がマヒするような苦味を与えてくる陵辱液に意識を失いそうになる。

口腔から漂ってくる雄粘液の匂いは鼻腔にまで染みつき、口腔で充満する精液の溶鉍熱に脳まで火照らされ、目の前が暗くなつていく。

「早く飲めリティ。でなければガキの命は……」

「うう……ゴクッ……んくんく……ゴクッ……ゴクッ……」

悲しみと屈辱に打ちひしがれながらリフィティアは喉を上下に動かし、レクアードの前で山賊首領の子種を胃に流し込んだ。

彼女の喉が一動きし、口腔に残った精液を頬をすぼめて嚥下する度に、ボギは心地よさそうに腰をゆつくりと前後させ、肉槍の中に残った粘液を喉内に垂れ流してくる。

（なんでレドの目の前で、こんな男のモノを飲まなければ……）

横から少年剣士の視線を感じながら、ドロリと喉粘膜に引っかかり、火傷するような雄熱を染み込ませてくる陵辱液を嚥下し続けた。

苦液をまとわりつかせた舌を肉幹に這わせる度に、喉には終わらない残滓がダラダラと注がれ、横から突き刺さるレドの視線が、山賊に淫らな奉仕をした自分を侮蔑しているようにさえ感じてしまう。

「うう……んっ……んん……ゴクッ……ふうはあああつ……はあはあはあ……」

ペニスから吐き出され、喉や口腔を満たした陵辱液の全てを胃に落とし、雄槍の中の残

女騎士長はあまりの悲しみに声も出せず、汗まみれの肢体を晒したまま泣き続けた。

「クク、どうした？ イキすぎて、何も考えられなくなったか、リテイ」

「くはッ!? ひゃふううううううううううう——ッ！」

プシュッ！ プシュウウウウウウウウウウウウウウウ……ッ！

長い睫毛をフルフルと震わせ、未だ絶頂と悲しみの底にいるリテイを侮辱したボギが、半分剥き出していた淫核に触れてきた。

それだけで肉悦を覚えてしまった彼女の肉体は歓喜に震え、半透明な色の尿道から潮が噴き出し、再び絶頂へと駆け昇ってしまう。

「ひやくッ！ んうッ……ッ……はあはあはあ……」

（もうダメ……私もう……何も考えられな……）

膣内射精での絶頂に、立て続けの淫核での潮噴きに、快楽安心してしまったリファイティアは息を喘がせ、秘孔から精液を溢れ返しながら、チヨ口チヨ口と潮を垂れ流す姿を観衆に披露し続けた。

「クク……リテイはもう限界のようだな。おいお前ら、娼婦には不似合いの鎧を剥ぎ取れ」

「んあ……んん……はふ……」

首領の命令を受けた部下たちが、一斉に放心した女騎士長の肢体に群がり、胸や淫部を触り、そして敏感な乳芽や淫核まで摘み転がしながら彼女の鎧を剥ぎ取っていく。



ガントレットと、レッグガーターと一体型になったロングブーツを瞬く間に剥ぎ取られ、白い手や足の先まで彼らの目に晒しながらも、肢体に感じる悦感に艶めかしい声を洩らす美少女。

抵抗もせず、カップを千切り取られたコルセット状の胸当てまで肢体から外された彼女は、胸元が裂かれたチュニツクとミニスカートのみの姿にされ、テーブルの上で放心し続けている。

「さて、今度はもつと感じさせてやるぞリテイ」

もう愛称で呼ばれても何も感じない。彼女はなすがままボギの手で裸足にされた両脚を床につけ、上半身をテーブルに突っ伏してお尻を掲げる姿勢にされた。

本物の娼婦のようにお尻を男に突き出した彼女の淫部は、淫らに蠢きながらネットリと愛液と精液の混合液を秘孔から溢れさせ、粘糸を引かせながら床へと滴らせていく。

(レドに見られて……)

娼婦のような体勢にされ、秘孔から精液を溢れさせている姿が、涙を流すレクアードに見られている事を感じる。だが、もう彼の目から淫部を隠す気も起こらない。

「ずいぶんと大人しくなったじゃないか、ならばこつちも頂くぞ、リテイ」

「くはッ!? そこは違う……違うのに……ンああああああッッッ!」

ズブッ……ズブズブリユズブウウウウウ……。

呆然と突き出していたお尻の谷間に愛液にまみれたペニスが押しつけられ、拒む間もなくボギの拳のような亀頭が小さく佇んでいた窄みに突き刺さり、括約筋を押し分けながら蛇腹状の腸内へと侵入してきた。

「はくッ……あううう……すごい……お尻が痒く……私おかしく……」

処女のお尻を貫かれたにも拘らず、リフィティアは痛みを感じることもなく、早くもムズ痒くも心地いい痺れを全身へと駆け巡らせ始めてしまった。

「初めての尻だというのに感じるとは、とんでもない女騎士長だ」

「あうっ！ んあッ！ うッ、んくッ、ああッ！」

腸内でペニスをピストンさせ始めた首領が、彼女を蔑んできた。

だがすでに肉悦に支配されてしまった女騎士長は、お尻から直接脊髄を痺れさせるような肉痺れに理性を掻き乱され、テーブル上に美乳を潰し広げながら、乳芽から伝わってくる悦くすぐったさを楽しんでしまう。

「もうお前は立派な娼婦だぞリテイ。クク……、誰か床に仰向けで寝ろ、この娼婦を乗せてやるっ！」

ボギの一言に、美少女騎士の陵辱シーンを見せつけられていた山賊たちが騒ぎ、その中の一人がペニスを握りながら仰向けに寝そべていく。

「あいつのチンポを今からマ○コに突き入れてやるぜ」

「んあああ……また犯されるの……私……またアソコを……」

テールに突っ伏していた上半身を無理やり起こし、女騎士長の両脚を後ろから抱えて幼児の放尿体勢にした首領は、尻孔を貫いたまま寝そべった山賊の上に彼女の肢体を乗せていく。

（ああ……レドの前でまたあの硬いのでお腹の中をメチャクチャにされて、熱いのをいっばい……）

射精の肉悦を覚えてしまった肉体が歓喜に震え、潤んだ瞳が新しいペニスを映したまま離れない。秘孔はヒクヒクと蠢きながら涎を垂れ流し、下で待ち構えている肉槍を濡らした。

「あうっ!! ひゃふううううううううううう——ッ！」

ジュプッ……ジュプジュプジュプウウウウウウウウウツ!

新たなペニスを騎乗位で膣内に迎え入れたリフィティアは、長い髪を振り乱しながら天井を見上げ、歓喜の悲鳴を部屋中に響かせた。

下半身の二孔で男を迎えた肉体には、薄壁を通して硬く熱い肉槍が擦れあい、全ての肌が震えるような悦流が肉体中を駆け巡り、頭の中を真っ白に染めてくる。

「あはッ! いい……アソコもお尻も硬ひのが擦れれ……いいのッ! もっと突き上げて……レドの前でもつろ気持ちよふ……」

美唇の端から唾液を零しながら、淫欲に身を墮とした女騎士長が肢体を上下させ、下半

身を貫いた二本の肉槍を自らの意思で律動させ始めた。

青い瞳は理性の輝きを薄れて輝き、呂律が回らなくなった唇はもつと強い刺激が欲しいとばかりに男たちを誘い、恋する少年の前で排他的な肉悦を求めてしまう。

「ククク、リティのお許しがでたぞお前ら、この肢体の全てを使って気持ちよくしてやれっ！」

「おおうっ！ やつとぶちまけられるぜ」

「もう我慢できねえ、見ているだけで射精しちまいそうだったぜっ！」

「やめろっ、もうこれ以上リティを……」

「誰がやめるかよっ、あの女をメチャクチャに犯して、精液まみれになる姿をお前に見せつけてやるぜっ！」

レクアードの叫びを笑い飛ばしながら山賊たちは雄叫びをあげ、騎乗位のまま二孔を貫かれて肢体を上下させる女騎士長に群がっていく。

「うはっ……こんなに無理……あう……そんなに乱暴に……はっ……んんちゅぷううううウううウううウっ！」

幾多の肉槍が全身に擦りつけられ、そのうちの一本が柔房の谷間を陵辱し、別のモノが口腔に突き刺さってきた。両手にはそれぞれ別のペニス握らされ、雑巾をきつく絞ったような硬さと掌を灼く雄熱が、腕全体に染み渡ってくる。

「んチュパッ！ んッ、んッ、んチュルル……」

（すごい……身体中が熱くて……ペニスが美味しくて……アソコもお尻も、胸も……全部気持ちいい……）

全ての孔を貫かれながらも、彼女はその肢体を歓喜に震わせ始めていた。

男たちの獣欲を叩きつけられているだけでも拘らず、肢体の上下運動は更に激しさを増し、秘孔と尻孔は突き刺さったモノを喰い締めたまま胎内の壁をネットリと絡め、早く精を搾り取ろうと奥へと蠢き立っている。

美唇は涎を垂らしながら喉奥にまで淫根を迎え、長い髪を激しく乱れさせながら美貌を前後に振って奉仕を続け、強制的に胸淫されたにも拘らず、二つの美乳を千切れてしまうほど激しく揺らし、谷間を陵辱する雄槍に快楽を与えながら薄ピンクの乳芽を小刻みに震わせてしまう。

両手は男の先液にまみれながらその切っ先を親指でくすぐり、いつ射精してもいいように、亀頭を自分の肢体へと向けた。

「んふうはッ！ んチュパッ、チュプッチュパ……はんんッ！ みんないいのッ！ 硬いのが気持ちよくて……あうううッ！ 出して……私の身体にいっぱい出してえええッ！」
一度ペニスから口を離し、歓喜の嬌声をあげながら射精を求めたりフィテアの動きが、更に激しい物へと変わって男たちを刺激し始めた。

「リテイ……」

かすかに聞こえた少年の声に気づき、山賊たちに奉仕しながら淫欲に濡れた目を彼に向ける。

「嘘だよね……なんでそんな事して……」

今の自分を信じられないように見つめてくるレド。だが、媚薬で身体を発情させられ、全ての孔を貫かれ全身を陵辱される彼女は、もう理性が崩れ去っていた。

自身の淫らな姿を恋する少年に見せるといふ、背徳的な興奮に身を焦がした彼女は、騎乗位のままわざと脚を広げてペニスを咥える秘孔を見せつけ、美味しそうに淫根を貪り始めた。

「うおおっ！ 本当に処女だったのかよこの女っ！」

「俺もう射精でちまうっ！」

「この淫乱女がっ、これじゃ楽しめねえじゃねえ……くおっ!？」

まるで娼婦のような動きへと変わった彼女の姿に、散々陵辱シーンを見せられていた山賊たちには射精感が込み上げていた。

胎内や肌に触れるペニスの脈動でそれを感じ取った女騎士長は、蟲惑的な笑みを浮かべながら喘ぐ声を大きくし、彼らを更に興奮させて射精欲を掻き立てていく。

「んあああッ！ いいッ！ チンポ気持ちいいのッ！ 早く出して……早く私をみんなの

物にしてええええええええええええッ！」

「ジュプツ！ シュリユツ！ チュパツ！ ズニユツ！」

女騎士長の身体のいたるところから淫らな挿入音と奉仕する音が奏でられ、白い肌的大量の汗が玉のようになって伝う。秘孔からは漏らしたように愛液が溢れ、下に居る男をビショビショに濡らしながら、秘孔を締めつけて精液を搾り出そうと蠢かせた。

「んはッ！ もうダメ……私……わたしもう……イク……イッ……」

肢体を上下させるにつれ、下半身の二孔からバチバチとした快樂の電流が発生し、脊髓を感電させながら脳を貫いてくる。

ペニスに觸られる全身の肌は、まるでそこが淫部にでもなったかのようにムズ痒く痺れ、彼女を本物の娼婦にする最後の悦流が今にも脳を突き刺そうとしてきた。

「射精だすぞっ、この女騎士長のマ〇コに射精してやるっ！」

「飲ませるぜっ！ 吐くまで飲ませてやるっ！」

「その綺麗な顔、精液でベトベトにしてやる、うおおおっ！」

「びゅるるるっ！ どびゅるっ！ びゅぶどぶっ！ びりゅびゅるびゅぶっ！」

「んううううッ!? んぶッ、んくッ！ ゴクゴク……んぶうあああッ！ いっぱい……い

っぱい私にかかって……イク……イクううううううううううう——ッ！」

一人の遠吠えとともに、彼女の肉体を犯す全ての男が肉槍から陵辱液を迸らせ、肢体の

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>